

515-41-(2)



1200500582855

扇桶パンフレット — 第二輯

芭蕉を中心として

白田亞浪著



515 41 (2)



515
41
(2)

石楠パンフレットの言葉

石楠パンフレットは、私の論、説を主として、時に石楠の人々の句抄をも交へて順次刊行したいと思ひます。それ故これを集成すれば、私の論説集ともなり、また石楠の人々の個人句抄集ともなるのであります。先進後進の別なく、俳句を知ると否とに拘らず、何ん人にも読んでいただくことを切望いたします。一本の木も二本となり三本となり、次第に生ひ茂れば、自ら森とも林とも樹海ともなります。そしてそこにパンフレットとしての新意義も生じてまゐります——亞浪

芭蕉を中心として

杜國にそそいだ芭蕉の愛
野さらし紀行の句の表現
作家としての支考と許六
このころ(高野山奥の院にて)

白田亞浪



I 種
W



1200500582855

杜國にそそいだ芭蕉の愛

一度び自然愛の懷ろに其のいのちを托した芭蕉ではあるが、生くる限り影の如くに執念くもつき纏、人間の苦惱は、親なく妻なく子なき孤り身の彼れの心に如何ばかり淋しさを底深く刻みつけたことであらうか。如何に悟りぬいても人間は人間である、折りに觸れ事に當り、紅涙は其の雙頬を傳ひ流れたことであらう、紅血は其の全身を躍り流れたことであらう。人間としての彼れの愛は、おのづから其の弟子達の上に投げられて往つた。またさうでもせねば、餘りの孤獨さに堪へなかつたであらう。

朝がほに我はめしくふをとこかな——の一句に其角の放縱をいましめた心も、死にゆくいまはに路通が身の上を頼んだ心も、また幽居の杜國をわざ／＼伊良古に訪ねて慰めた其の心も、心の現はれはそれ／＼違つてゐるにしても、みな其の愛の泉の滴りである。

人世の漂泊ひ人として、一處不住の身であつたとはいひ、住まるところ行くところ、其の弟子達は心の底のまことを捧げて衣に食に奉養したのであつたから、況して其の心と心とを貫く俳諧の道がぎツしりそれとこれとの楔子となつてゐたのであるから、芭蕉にしても一しほに愛する心が深くな

つていつたものであらうが、またそれだけ弟子達も彼れに仕ふる心が敦くなつていつたものであらうが、斯うした美しい清らかな愛の鏈につながれてゐたことは、芭蕉も弟子達も何んといふ仕合せなことであつたらうか。

弟子達といつても、澤山の人々の中には、正風の礎とまでいはれてゐる『猿蓑』の選輯者の一人として、さながら其の『猿蓑』をひとりで脊負つてゐるやうな凡兆が、何うした譯か、彼れに背いて俄かに其の名が消えたばかりでなく、外にもさうした者が一人二人にとゞまらなかつた事であらうが、それは彼等師弟の間柄として極めて稀れな出来事である。一つは儒教道德の根さしが其の心に深く植ゑつけられてゐた爲めでもあらうが、今の世には滅多に見られさうもない理想の世界を描いて居つた。

わけでも、彼れと杜國とは如何に深い心のつながりがあつた事であらうか。同じく旅の伴をした者には『奥の細道』の曾良もあつた、『更科紀行』の越人もあつたが、『笈の小文』の杜國ほどにくしくまれた者はなかつた。あれほど多くの弟子達のうちで、彼れの夢にまで入つて其の袂をしぼらせた者は、唯だ一人の杜國があるばかりである。

いつたい杜國はどんなであつたらうか。『冬の日』の作者として歌仙にすぐれた技倆を示してゐる外には、『笈の小文』に萬菊丸といふ別名で芭蕉の伴をしてゐるだけで、俳句の如きは僅かに二三

句の稱すべきものがあるに過ぎないほど芭蕉門では割合に影のうすい一人である。それは早く世に隠れた爲めでもあらうが、それだけまた芭蕉が彼れの上に深い愛の心を投げたことが、解き難い謎のやうにも思はれる。

芭蕉を始め芭蕉門の人達が本當に俳諧の眼を開いたのはこれだといつてゐる其の『冬の日』の尾張五歌仙に於いて、荷兮、野水、重五、羽笠等の新鋭と競うて、しかも一頭地を抜いてゐる杜國。

かしらの露をふるふあか馬

重五

冬がれわけてひとり唐萱

野水

朝鮮のほそり芒のほひなき

杜國

しら／＼と碎けしは人の骨か何

杜國

影法の曉寒く火を焚きて

芭蕉

小三太に盃とらせひとつうたひ

芭蕉

あるじは貧にたへし虚家

杜國

月は遅かれ牡丹ぬす人

杜國

黄昏を横にながむる月細し

杜國

ひとつの傘の下擧りさす

荷兮

隣りさかしき町に下り居る

重五

蓮池に鷺の子遊ぶ夕まぐれ

杜國

らうたけに物讀む娘かしづきて

重五

北の方なく／＼簾おしやりて

羽笠

燈籠二つに情くらぶる

杜國

ねられぬ夢を責むるむら雨

杜國

あだ人と樽を棺に呑みほさむ

重五

漸くはれて富士見ゆる寺

荷兮

芥子の一重に名をこぼす禪

杜國

寂として椿の花の落つる音

杜國

ひとの粧ひをかゞみ寒磨

荷兮

江を近く獨樂庵と世を捨てゝ

重五

花棘馬骨の霜に咲きかへり

杜國

我が月出でよ身はおぼろなる

杜國

おもふ事布搗歌にわらはれて

野水

乞食の蓑をもらふしのゝめ

荷兮

うきは二十を越ゆる三平

杜國

泥の上に尾を引く鯉を拾ひ得て

杜國

血刀かくす月暗のきに

荷兮

しづさかに飯臺覗く月の前

重五

霧下りて本郷の鐘七つきく

杜國

露置く狐風や悲しき

杜國

伏見木幡の鐘花をうつ 荷 兮 とくさ刈下着に髪を茶釜して 重 五
色ふかき男猫一つを捨てかねて 杜 國 檜笠に宮をやつす朝露 杜 國

斯うした伎倆を示してゐる其の杜國は、間もなく俳壇から影をひそめて、ふつつり消息が絶えて了つた。芭蕉が彼れに興へた「いかにしてか便も無御座若は渡海の船や打われけん、病變やふりわきけんなど方寸のみ碎候されど名古屋の文に御無事の旨推量に見え申し候云々」といふ手紙は、或は此の頃ではなかつたらうか。彼れの身を氣遣ふ芭蕉の愛の深さは、底ひの知れぬわだつみのそののやうではないか。

その芭蕉と彼れとの心からの誓ひが、何時からのことであつたか、また何ういふ工合ひに運ばれたのか、今はたしかにそれと知る由もないが、兎も角「五歌仙」の興行された貞享元年のそれも十一月のことであつたらう。荷兮も野水も重五も彼れと共に其の門に入つたのである。

彼れは名古屋に生れて名古屋に住み、刀劍の御用を承つて南を姓とし、壺屋平兵衛とも飾屋平兵衛ともいつてゐた。この年芭蕉は四十一歳であつたから、彼れはまだ若盛りの押しも押されぬ

男一匹であつたらう。その杜國が俄かに影をひそめたのであるから、世間では彼れ此れと尾緒をつけて噂し合つた。藩中の何がしと馴れ染めたのが暴露ばくろて、お咎めを受けたのだともいひ、さうではない御用筋の間違ひから所構へになつたのだともいひ觸らした。

でも、多くの人達は「月は遅かれ牡丹ぬす人」とか「燈籠ふたつに情くらぶる」とか「芥子の一重に名をこぼす禪」とか「うきは二十を越ゆるまるがほ」とか「ねられぬ夢を賣むるむら雨」とか「我月出でよ身はおぼるなる」とか「色ふかき男猫ひとつを捨てかねて」とか次ぎ次ぎに見出さるゝ、あだめいた彼れの附け句を證しとして、其の裏に女のあることに定めて了つたやうであつた。

無論同門の誼みの深い土地者の荷兮でも野水でも、重五でも羽笠でも、また近かくの熱田や鳴海の弟子達は浅いか深いか其の事情は知りきつてゐたことであらうが、揃ひも揃つて口をつぐんでゐる。それとも口をつぐまねばならないやうな重大な事柄が絡んでゐたものでもあらうか。「冬の日」に次いで翌二年の春に『春の日』が芭蕉自身によつて選ばれたのであつたが、最う彼れの名は其の歌仙中に見出せない。唯だ其の巻の末に收めた發句の中に左の一句をすぐれたものとして、

うれしさは葉がくれ梅のひとつ哉 杜 國

他は餘りよくない句が四五句載せてあるばかりである。それにしても彼れが芭蕉を送つて別れる時

この頃の氷ふみわる名残りかな 杜 國

と心の底をうち割つて斯うした名残りを惜んでゐるのであるが、この時には最う問題が持ちあがつてゐたのではあるまいか。そして『春の日』が出来あがる頃には、既に伊良古に侘び住居の世を忍ぶ身となつてゐたのではあるまいか。

白芥子にはねもぐ蝶の形見かな 芭蕉

彼れに贈つた留別の此の一句から考へ合せると、芭蕉は十二分に彼れの茲に立ち到つた其の心情を憫れみ汲んでゐたものに相違ない。其のすぐれた詩才を思ふにつけても、『春の日』の歌仙に彼れを見出し得なかつた芭蕉は、一しほ旅の淋しさを味はつたことであらう。「白芥子」のはかなさ「はねもぐ蝶」の哀れさ、この一句を「形見」に残した心の侘しさが涙をそよるではないか。

それから三年目の冬（貞享四年）のことである。芭蕉はまたもや漂泊らひの旅にのぼつた。

「西行の和歌に於ける宗祇の連歌における雪舟の繪における利久の茶における其貫通する物は一なり、しかも風雅におけるもの造化にしたがひて四時を友とす見る所花にあらずといふ事なし、思ふ所月にあらずといふ事なし、像花にあらざる時は夷狄にひとし心月にあらざる時は鳥獸に類す、夷狄を出で鳥獸を離れて造化にしたがひ造化にかへれとなり。」と喝破し、

旅人と我名呼れんはつしぐれ 芭蕉

と心の叫びをあげて、東海道を西へ西へと上つて往つた。けれども芭蕉の心は、なにものよりも、杜國の上に注がれて居つた。一旦鳴海まで往つたのであるが、常々越人が彼れの事どもを知らせてゐたものでもあらうか、彼れを訪ふべく越人に案内を頼み、二十五里といふ長い距離を引き返して、三河の吉田に泊り、

寒むけれど二人寝る夜ぞ頼もしき 芭蕉

その侘しい夜の明くると共に、伊良古の保美の杜國が隠れ家さして歩みを運んだ。

すくみゆくや馬上に氷る影法師 芭蕉

繩手田の細徑を辿りつゝ、海よりの風を寒みては斯うした句が胸を衝いて溢れ出た。

一別以來久方振りに彼れと相見たその夜の語らひが如何に濃やかであつたか、師弟の心と心とはたゞ一つのまことに溶け合ひ、寒さも忘れて語り明したことであらう。ひとり越人が尋ねて呉れたばかりで、荷分も野水も其の外ありし日の友垣は碌々手紙すら呉れないのに……彼れは芭蕉の深い師恩と、越人の厚い友情とにさめくと泣きもしたことであらう。

芭蕉は旅の序でに、保美から一里ばかりの伊良古崎へも往つて見た。その時の、

鷹一つ見つけてうれしいらこ崎 芭蕉

鷹一つを見つけ得たうれしさのそれは、杜國にめぐり遇つた芭蕉の心のすがたでなくて何んであらう。鷹よ鷹よ、鷹のそれにも似た彼れは、あたら翼を収めておのがじしほしいまゝに空翔ける小鳥の影を戀はぬ日はなかつたことであらう。

芭蕉と彼れとは盡きぬ名残りを惜みつゝも、また逢ふ時と處とを約して相別れた。

芭蕉は、杜國がなれの果ての哀れさに心を残しつゝも越人と共に鳴海の寂照菴知足（千代倉勘左衛門といひ、實永元年四月に六十五歳で死んだ）が許に旅の疲れをやすめた。

知足は流石に芭蕉の心を汲んでゐた。「もと見し人を訪ひ、三河の國に越え、序おもしろければ伊良古崎見んと、白浪よする渚をつたひ、からうじて歸り給ひし旅の哀れを聞きて」と、

焼飯や伊良古の雪にくづれけん 知足

といふ心からの一句を捧げて犒つた。芭蕉はそれを立句として佗びしい心を遣らうとした。そして越人と三人での表六句が忽ちに巻かれたのであつた。

砂さむかりし我があしの跡 芭蕉 眠るやら馬のあるかぬ暖かさ 芭蕉

松をぬく力に君が子の日して 越人 曇りをかくす朧夜の月 越人

いつか烏帽子の脱ける春風 知足

その一しほに「寒むかりし芭蕉の足の跡」を思ふにつけても、「松をぬく力に子の日」を祝ふて「いつかは烏帽子の脱ける春風」を浴び立つ折りのあらうことを念じた師弟の心は有り難くも尊いではないか。次ぎの日は越人が發句をして心のまことをうたひ合つた。

置炭や更に旅ともおもはれず 越人 脊戸より直に踏みこはす垣 越人

雪をもてなす夜すがらの松 知足 歌よせん此名月をただにやは 知足

海士の子が鯨を告ぐる貝吹きて 芭蕉 蕎麥のみつぎを通す守關 芭蕉

知足の「歌よせん」も、芭蕉の「通す關守」も杜國に思ひを寄せてゐるのが肯けようではないか。そして越人が名古屋へ歸ると、今度は荷兮と野水とが尋ねて來た。

幾落葉それほ袖もほころびず 荷兮 今朝の月替ふる小荷駄に鞭あてゝ 知足

旅寢の霜を見するあかがり 芭蕉 里の踊りに野菊折りける 野水

芭蕉の心はいつまでも杜國の上を離れてはゐなかつた。

杜國を懷ふ心は、やがて古郷を懷ふ心を誘つた。芭蕉は師走の十日過ぎにひとり淋しく伊賀へ戻つて往つた。そして年を送り年を迎へた。

舊里や臍の緒に泣く年の暮 芭蕉 春立てまだ九日の野山かな 同

それから彌生の半ばも過ぎた。芭蕉は「そゞろに浮き立つ花」にそゞられて、よしのゝ花を見る

べく思ひ立つと共に、豫て約束をして置いた伊良古の杜國に同行を求めてやつた。杜國は如何に嬉しく思つたことであらう。直ぐさま忍びやかに旅立つて伊勢に出迎へ、自ら改めて萬菊丸と名乗り、それこれ二つの檜木笠に、乾坤無住同行二人と前書きして

よし野にて櫻見せうぞ檜木笠 芭蕉 よし野にて我も見せうぞ檜木笠 萬菊丸

と書き並べた。芭蕉も彼れも何となく興がつてはゐるものゝ、そして萬菊丸といふ名前は師翁の爲めに「童子となりて道の便りにもならん」といふ彼れの心の温さにふさはしいとはいふものゝ、其の裏には世を憚つての隠れ名といふことが肯かれて、名前の子供らしさが一しほ哀れを覚ゆる。

芭蕉は「旅の具多きは道のさはり」だといつて、大概のものは取り捨て、了つたが、夜の料の紙子一着と、合羽やうの雨着と、硯、筆、紙、薬までも用意して、書筒と一つに包み、後ろに脊負ひながらとぼくと歩いて往つた。彼れは芭蕉の影に引き添ふやうに、あとから靜かに跟いて往つた。定めし「すねよわく力なき」師翁の草臥れを氣遣うては、其包みを自分が脊負はうとしたことであらうが、芭蕉はまた彼れが人目を忍んでの憂き旅の心を思ひやつてなかくに聴き入れなかつたことであらう。疲れはだん／＼に兩人の歩みを鈍らした、暮れ遅き春の日もいつしか西に落ちて宿欲しの心が兩人の胸から胸へ傳はつた。芭蕉は、

草臥て宿かる頃やふじの花

の一句を口ずさみながら宿りについた。それから初瀬へ往つては、

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅 芭蕉 足駄はく僧も見えけり花の雨 萬菊丸

と唱和し、葛城山から三輪、多武峰、躰峠、龍門、西河、布留、布引、箕面と順次めぐりめぐつて吉野を指した。道すがら芭蕉は、

猶見たし花に明けゆく神の顔(葛城山) 雲雀より上にやすらふ峠かな(躰峠)

ほろ／＼と山吹ちるか瀧の音(西河) 日は花に暮れて淋しやあすならふ(布留の山奥)

などいふすぐれた句をのこして往つたのであるが、彼れは旅立つてこのかた、句らしい句が一句も出来なかつた。

こゝろざした吉野の花には三日までも日を暮らした。曙の眺め、黄昏のけしき、有明けの月の哀れさなど、如何ばかり彼等師弟の心にせまり胸にみちたことであらう。芭蕉は「攝政公のながめに奪はれ、西行の枝折にまよひ、かの貞室が是は／＼と打ちなぐりたるに我はいはん言葉もなく、徒らに口をとちたると口をし。思ひ立ちたる風流いかめしく侍れども爰に至りて無興の事なり」と我れと我身の不甲斐なさをかこちながら高野を指して歩みを轉じた。彼れは素直に何處々々までも跟いて往つた。

高野の御山は流石に眞言秘密の壇場、溪の音、山の聲にも御佛のさゝやきが聽かれ、雉子の聲、

散る化の影にも胸をさし心を奪ふいひ知れぬ力が籠つてゐた。況して御山の報恩院には遁世渡願の機縁となつた舊主蟬吟の遺髪が納めてある。定めし無量の感慨に涙の湧き立つた事であらう。奥の院の道すがらは杉の聲、流れの音の一しほに胸せまるものがある。芭蕉も彼れも心鏡一碧、水の如く澄んでいつた。

ちゝはゝのしきりにこひし雉子の聲 芭蕉 ちる花にたぶさはづかし奥の院 萬菊丸
僧形の師翁を見るにつけても、彼れは罪の身にあるまじき己が姿を如何に悔ひ恥ぢたことであらうか。その句のよしあしは問ふべきでない。

斯くて兩人は御山を下り、今は芭蕉も旅馴れた身の「今宵能き行とらん、草鞋のわが足によろしきを求めん」とばかりを些かのねがひとして、南へ南へ、和歌の油曲に行く春の淋しさを味はひ、此處から引返して奈良へ向つた。

一つぬいで後ろに負ひぬ衣かへ 芭蕉 吉野出て布子賣りたし更衣 萬菊丸
世を捨てた芭蕉と、世に捨てられた萬菊丸の杜國、その衣を更へ、心の衣を脱ぎ更へた師弟の身に、しかも佛生會の奈良の詣での道すがら、あはれ鹿の子の生るゝを見たいといふ奇しき運命の絆に思ひ及んだ時、兩人は無量の法悦を感じたことであらう。

灌佛の日に生れあふ鹿の子かな 芭蕉

彼れは此處で師翁と袂を別つて伊良古へ歸り、芭蕉は山越えに攝津の國へ赴いた。

鹿の角先づ一節のわかれかな 芭蕉

この一句にも惜別の心の深さが偲ばるるではないか。彼れに別れてからの芭蕉は、大阪にて杜若を語り、須磨に時鳥の消えゆく方を思ひ、明石に蛸壺のはかなき夢をかこも、こゝを歩きどまりとして名古屋へ引き返した。

似合はしき芥子の一重や須磨の里

此句が『猿蓑』に亡人杜國としてかゝげてあるが、思ふに師翁の「海士の顔先づ見らるゝやけしの花」に和したものであらうか。亡人よ、亡人よ、伊良古に歸つてからの彼れの名は、またしても煙の如く消えて了つた。たゞ元祿三年五月に死んだとばかり傳へられてゐる。

□

『三月十七日伊賀上野を出で三十四日、道のほど百三十里、此内船十三里、駕籠四十里、歩行路七十里、雨に遇ふ事十四日。』

瀧の数七ツ 龍門、西河、蜻蛉、蟬、布留、布引、箕面。

古塚十三 兼好塚、歌塚、乙女塚、清盛石塔、忠遇塚、敦盛塚、人磨塚、通盛塚、松風村雨塚、越中前司盛俊塚、河原太郎兄弟塚、良將楠塚、能因法師塚。

峠六ツ 琴引、躰峠、くらがり峠、當麻岩や峠、小佛峠、桎尾峠。

坂七ツ 粧坂、西河上ちいか坂、宇野坂、かぶろ坂、不動坂、生田小野坂。

山峰六ツ 國見山、安禪嶽、高野山、つかいかヶ峰、勝尾寺山、金龍寺山。

此外橋の數 川の數 名もしらぬ山々はかきもらし候 卯月廿五日、萬菊、芭蕉。惣七様』

といふ、此の手紙によれば、彼れは須磨明石までも芭蕉の伴して往つたやうに思はれるが、芭蕉が「舊友に奈良にてわかる」といつて「鹿の角」の句を書きのこしてゐるのであるから、後人の偽作か、それともまた芭蕉が、何處までも伴して往きたかつた彼れの心を汲んで、萬菊と名を書き並べたものか。さうした詮索は餘人に任せて置かう。

□

これ程まで芭蕉にいつくしまれた彼でも、俳句の作者としては、いつまでも世に傳ふべき名句の多くを貽してはゐなかつた。同門の故友荷兮によつて編まれた『曠野』^{ちの}や其の他に掲げたものを合せて六二三句ばかり拾ひ出されはするが「うれしさは」の句の外は、

霜の朝せんだんの實のこぼれけり

荒鷹の羽風に動く灯影かな

この二句がすぐれてゐるだけで、多くは、

麥畑の人みるはるのつゝみかな

長閑さに物も思はぬ朝寝かな

これ以下のつまらないものばかりである。ただ左の一句は、

木がらしの落葉に破る小指かな

「舊里の人にいひつかはす」といふ前書によつて見れば、名古屋のゆかりの者、友としての越人か

在りし日の愛人かに贈つたものであらうが、人間としての儂らぬ心のいたましさは、涙をそそる。

それにしても芭蕉が留別の「白芥子」の一句に對して、彼れの「芥子の一重」の其の一重の白芥子が、はかなき彼れの生涯を暗示し象徴してゐるのは、偶然であつて、しかも偶然でないやうに思はれる。よしや囚はれの身であつても、も少し生かして置きたかつた。そして芭蕉のかぎりなき愛の心に酬ゆべく元祿の俳壇に其の詩才を存分に發揮せしめたかつた。

彼れが白日の光りをすら浴び得ずに死んだと聞いた時、芭蕉は如何に力を落したことであらうか其の翌元祿四年四月、嵯峨の落柿舎に足をとめて泊りを重ねた、しかも一周忌間近かの廿八日の夜に、まさしくと彼れを夢みて夢に泣いたのであつた。

「夢に杜國が事を云出して涕泣して覺る……我に志ふかく伊陽舊里迄したひ來りて夜は床を同じくし起臥行脚の勞を助けて百里が程影のごとく伴ふ片時も離れずある時はたはふれ或時は悲しみ吾心裏に染て忘るゝ事なければ成べし覺て又袂をしぼる」

あゝ、こゝに至れば杜國にそそいだ芭蕉の愛は神に通ずる。杜國の靈も定めし涙に咽んだことであらう。二百年後の私自身ですら、心で泣かずにはゐられない。

附記—これは素と某新聞に寄すべく突差の間に座右の『芭蕉全集』に於ける「笈の小文」を主として筆を執つたのを更めて補正したに過ぎないのであるから、研究的なものとしては勿論全かるべき筈がない。唯私としては彼れの傳の一半を傳へ、彼れに注いだ芭蕉の愛の滴りを汲み得れば時にとつての希ひは足りる。(一一、六)

野さらし紀行の句の表現

表現の自由、それは季感の擴充と併せて、近時我等の強調しつゝある俳句表現上の一主張である。同じく表現の自由と謂つても、或る人々の提唱しつゝある其れとは、全く發足點を異にしてゐる。即ち彼等は、俳句の性能を思はず、存立の要件を顧みず、生活斷片の現實暴露を得たりとして、其處に行詰まれる句境の展開を圖ると共に、それを時代の要求に應ぜざる新しい表現として、無理解の愚衆を瞞化して居るのであるが、それは俳句のいのちを伸び行かしむる理路では無く、反つて俳句を死滅の境に誘ふ魔道である。殊に其の避けんとした定型化の病弊を繰返すに至つたのみならず、他方に益々川柳化の墮落的傾向を趁ふに至つたのは、洵に滑稽の感に堪へない。

我等の稱する表現の自由は、第一、因襲的な手法に俟つ凝固の弊を脱し、第二、同意語の反覆より來る格調の定型化を避け、第三、自在なる而して正しき國語の斡旋によりて遺憾なく表現上の効果を收めんとするに在る。それが前提として、季感(今、自然感といふ)を中心生命とし、廣義の十七音を基調とする事は、此に贅するまでも無からう。それとこれとを混同してはならない。

今、此の意味に於て、我等は「野さらし紀行」に挿まれた芭蕉の俳句を擧ぐる事を禁じ得ない。蓋し該紀行は「甲子吟行」とも稱して、貞享元年秋八月、彼れが人生不惑 四十歳を算へた時、江東の草廬

を出で、海道を下り、京洛を巡つて尾張に逗り、更に山道を経て翌年の四月歸菴した當時の紀行として、芭蕉が眞乎の俳人としての旅行に於ける第一次の所産である。「笈の小文」なり「奥の細道」なりは、其の以後、彼れの藝術の爛熟期に生れたものであつて、何人も推稱を吝まざる所であるが、破壊に伴ふ建設の意氣と、熾烈な感情と、縦横の表現とは、「野さらし紀行」の有する特長として、彼れの藝術的生活に一異彩を放つものと言はねばならない。自然の偉靈を體驗して、悠久の光耀に輝く俳句を、比較的多く生み得た事は、「奥の細道」の大旅行の賚として、櫛風沐雨の艱苦に根ざす情意の緊張と道念の堅固さとは、實に驚嘆に値ひするものがあり。彼れの俳句は内容に於ても、また形式に於ても此に完成されたと言つても宜い。けれども極言すれば、其の表現の整齊は自ら他年に於ける定型化の因子を孕んでゐるとも言へる。建設の道程に在る「野さらし紀行」の天馬空を行くの概あるに比すべくもない。或は單純化と平明とは後者にあるであらうが、潑刺の生氣の前者に存する事は否まれない。我等は表現の自由に、豫期の効果を收むべく「野さらし紀行」に學ぶの尠くない事を思ふ者である。

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き 芭蕉

函嶺を踏破した其の日の感懷を注いだ一句として、富士を讚美した多くの俳句中に比較的傑出したものであるが、それを卷頭の第三句として、

猿を聞人すて子に秋の風いかに 芭蕉

の『秋の風いかに』は正に白熱して抑へ難き感情の燃焼を見るべく、ぐんぐん押し徹す力の強さが味はるゝ。定めし「三つばかりなる捨子の哀げに泣」ける姿にそゝられた情意の動亂も激しかつたに相違ないが、それと相俟てる表現の一致呵成的な些かの凝滞も無い點は、また建設時代の旺盛なる意氣を窺ふに足るものといはう。

三十日月なし千とせの杉を抱くあらし 芭蕉

これは伊勢の大廟に詣でた時の心の聲である。「我僧にあらずといへども鬢なきものは浮屠の屬にたぐへて神前に入ることをゆるさず暮て外宮に詣侍りける、一の鳥居の陰ほのくらく御燈處々に見えてまた上もなき峰の松風身にしむばかり深き心を起して」といふ前書に據つて味はふも、痛感せる神威と、自然の靈動と、感激の高潮が偲ばれよう。

芋洗ふ女西行ならば歌よまん 芭蕉 蘭の香や蝶の翹にたきものす 同

前者は「西行谷の麓」にて、後者は「其日のかへるさ或茶店に立寄れる」際に成つたもので、同じ紀行中に在つても、「蔦植て」や「秋風や藪も畑も」や「馬をさへながむる雪」や「山路來て何やらゆか」などの叙法なり調子なり整齊したものに比すれば、甚しく異色を存してゐる。殊に、

手にとらば消ん泪ぞあつき秋の霜 芭蕉 礎打て我にきかせよや坊が妻 同

躑躅生てその陰に干鱈こく女 同 牡丹葉深く分け出る蜂の名残かな 同

狂句風の身は竹齋に似たるかな 同 露とくくこころみに浮世すゝがばや 同

此等の句は、其の音敷に於ても十九音乃至二十音に及んで居り、縦横無碍の手法に具象化を全からしめんとした苦心は、定型的表現に凝固の弊を繰返しつゝある者の大に學ぶべき所である。

草まくら犬もしくるゝか夜の聲 芭蕉 海くれて鴨の聲ほのかに白し 同

梅白しきのふや鶴をぬすまれし 同 我衣にふしみの桃のしづくせよ 同

そしてこの數句は、長きも十八音に止まつて居るのであるが、如何にもこだはりの無い表現の自由を思はせると共に、「草枕」や「海くれて」の如きは「荒海」や「赤々と日はつれなくも」などいふ有數の名吟に譲らない秀作であつて、犇と迫る靈感に偉大な神秘の力と、涯り無き情趣の深さを感じしむる。『奥の細道』の句は概して粒揃ひであるのに反し、『野ざらし紀行』の句は玉石混淆、中には徒らに佶偲贅牙なものや、獨合點の悪作愚作が無いでもないが、それは建設の途上に於ける進歩の過程を示すものとして、希望の將來を有するだけそれだけ、伸び行くいのちの力を心會する。

表現の自由、それは要するに我等の一句一句に新らしきいのちの力を得せしめんとする念願に外ならない。そしてそれを得せしむべく、我等は祖先の眞實に還つて、創造と建設とに不斷の努力を續けねばならぬ。

作家としての支考と許六

言論の雄、必ずしも創作の雄ではない。許六や支考の徒が即ちそれであつた。作家としての雄、また必ずしも言論の雄ではない。彼の天明期を代表する偉大の作家として瞻仰せらるゝ、與謝蕪村が即ちそれであつた。……これは是れ『俳句研究』に掲げた「蕪村の言葉を味ひつゝ」の冒頭であるが、雲の如く林の如き元祿俳壇の英材中にあつて、其角にせよ去來にせよ、言説の聴く可きものが無いではない。殊に一篇の『去來抄』は蕉門屈指の述作として、悠久に價值づけらるゝものである。けれども、眞に言論の雄として、宛ら一世を風靡するの概があつた者は、第一に支考であり、第二に許六を推さざるを得ない。

支考の俳論として著聞せるもの、曰く「葛の松原」曰く「續五論」曰く「俳諧十論」曰く「俳諧古今抄」曰く何、曰く何。その内容の價值如何は兎も角も饒舌驚くべきものがあり、正に言論家として元祿俳壇に豪嘯せる彼れの矜りを裏書して餘りある。然も去つて一度び作家としての彼の門裡を窺はん乎、彼の所産として世に貽されたるものは二百有餘に過ぎざるが上に、その藝術的價値の貧弱にして低劣なる、幾んど創作的天分の缺欠を思はしむる。若し我等をして、嚴正なる批判のメスを

揮はしめん乎。僅に存在を價值づけ得るものは左の數句に過ぎない。

なにがし主馬が武江の旅店をたづねける時

引鳥の中に交るや田螺とリ

同

春雨や枕くづるゝうたひ本

支考

里の子が燕握る早苗かな

同

山鳥の樵をだます雪間かな

同

牛叱る聲に鳴立つ夕かな

同

それも押し迫る靈性に乏しい憾みがあり。唯だ「牛叱る」に於て寂寥感を、「里の子」に於て手法の敏捷を、「山鳥」に於て事件の奇異を、「引鳥」に於て表現の洒脱を、「春雨」に於て彼の生活相を味識し得るに止まり、未だ作家を以て容すべくもない。

馬の耳すぼめて寒し梨の花

支考

水澄て靱の芽青し苗代田

同

出女の口紅おしむ西瓜かな

同

松風をうしろにしさる田植かな

同

雁の聲臙くゝと何百里

同

涼しさや瓜ふむ闇の畦傳ひ

同

晝顔の砂踏み崩す暑さかな

同

水仙や門を出れば江の月夜

同

降る雪に淡路は夢の心地也

同

これ等は、それに亞ぐものであるが、第一は「耳すぼめて」と「寒」との關係が突然であり、第二は座五の「苗代田」が管々しく。第三は「口紅」と「西瓜」の肉の紅とを照應せしめた嫌ひがあり、第四は「松風」をうしろといつて、尻を吹かるゝ相を暗示的に表現した一種の技巧が厭味を思はしめ、第五

の「何百里」は輪廓描寫に失し、第六の「瓜ふむ」にもはからひがあり、第七は「晝顔の」から「砂踏み」への續き工合に鑑賞上惑ひを生ぜしむる虞れがあり。第八は「水仙」の位置が明かでない。最後の「夢の心地」は茫乎とした状態を形容したものはあるが、未だ感情が純化されてゐない。其の他に於て、多少とも採り柄のある句は、

帷子のねかひはやすし錢五百 支 考 居りよさに河原鵜來る小菜畑 同
 煮木綿の雫に寒し菊の花 同 菜をきさむ廣敷寒し吹どほし 同
 松風に新酒を澄ます山路かな 同 立白に手杵連れ立つ踊かな 同
 朝鷹のぬれて出るや花の中 同 參宮の笠着て出たる田植かな 同
 うねくと流るゝ雨やけしの花 同 籠るべし百日紅の散る日まで 同

右に記したやうなものであるが、其一句くを仔細に詮索すれば、必ず何處かに感情の不純な難點が潜んで居る上に、兎角理知が働きかけてゐる。「居りよさに」などゝ擬人化せしめたり、「籠るべし百日紅」などと縁語的技巧を試みたり、「錢五百」などと潤達を街つたり、「立白に手杵」などと酒脱を装つたり、常に工みと計らひとに據つて讀者を釣らうとする淺はかさが見透かさるゝ。

歌書よりは軍書に悲し吉野山 支 考 寒ければ寝られず寝ねば猶寒し 同
 この二句は世間的に有名なものであるが、如何にも理智的按排の彼の性癖を反映した駄作である。

卵の花に祈り過ぎたる曇りかな 支 考 ちりくりに春や牡丹の花の上 同
 鶯の調子かへたるあらしかな 同 花の咲く木はいそがしき二月哉 同
 梢まで來てゐる秋の暑さかな 同 櫻さくひとへに彌陀の彼岸かな 同
 野は枯て仲すものなし鶴の首 同 腸に秋のしゝたる熟柿かな 同
 夏と秋と今宵や雲のつめひらき 同 夕顔に鏡見せはや五郎四郎 同
 世の中を後の皴や更衣 同 山吹に春を渡して青葉かな 同
 横豎に織らせて見ばや雪の糸 同

殊に、斯うした風の縁語や弄語を斡旋したものが大多數を占めて居り、作家としては讚すべき何物をも彼に見出し難い。同じく言論家たる許六は其の『同門評』に於て、彼を月旦して曰く「伊勢の支考は、後猿の時、底をぬきて流行すれども難じていはゞ、實すくなく。……此人慥に血脈相續して、當時諸門弟のうちに、脊をならぶる人なし。されども質不實に陥る心あれば、行末覺束なし」と。彼は果して俳諧の底をぬき、芭蕉の血脈を相續し得たりや否や、これを彼の創作に照らせば、餘りに「實すくなく」「質不實」なることを思はざるを得ない。彼は畢竟世俗的なる野心の權化のみ。名利の走狗のみ。彼は其の述作に於ける虚誇と街學とに據り、芭蕉歿後の紛亂せる俳壇を一統して、芭蕉の後繼者たらんことを企圖せるの。如何にして估らん哉、是れ彼れが心裏の全體である。そ

れは屢次匿名の自讃論を公表して憚らざりし一事を以つても知らるべく、自ら恃むの厚き許六すら、尙ほ且つ彼の術學論に眩惑されて、或は「底をぬく」と稱し、或は「血脈を相續す」と讃した程であるから、群盲相率ゐて彼の門頭市をなすに至つたのは、敢て怪しむに足るものがない。

此に於て乎思ふ、言論家としての彼の幾千萬言が、果して幾計の權威オウソウイを有する乎と。蓋し俳人の立言は、一般文藝と異なり、常に其の創作は、其の評論と相俟つを理想とする。然も彼の創作にして既に然りとせば、彼の立論は、創作を離れたる別個の動機に根ざすものとして、其の全價値を割引きすべきではあるまいか。我等は未だ彼に對して多くの敬意を拂ふべき所以を知らない。寧ろ饒舌の價値の黒鉛にだも如かざることを深く思はしめらるゝ。

また許六は、有名なる『俳諧問答』を始めとして、『篇突』『宇陀法師』等支考のそれに譲らざる幾多の述作があり、彼の編せる『風俗文選』の如きは俳人の文集として、其の勞や多とすべく、筆を執り文を行るに於て、彼は必ずしも支考の後へに居るべき者ではない。のみならず彼の立論は、常に其の露骨なる點に於て、甚だしく支考と異なり、其の「自得發明辯」にせよ「同門評判」にせよ、「自讃之論」にせよ、自ら估り自ら得たりとするに於ては、寧ろ支考に駕するものあるに拘らず、雅氣滿々として時に愛すべきものがある。けれども彼は果して其の「俳諧指南」に自ら畫き自ら讃し

て「先師のはいかい、口寫をきくごとく五十韻百韻卷面に高低ありて、退屈せず。しかも新らしく終に世に出ぬはいかいを並べ、哀なる所はあはれを述べ、さびしき所には淋しきを演べ、滑稽のおかしみ面白み、此等を自由にする者は、五老井一人なり。發句の自由を得、はいかいの作意をつくし、文章をたくさんに書くものは、許六が事なり。正風血脈の門人、芭蕉翁二代目といはむもにくからんか」と放言せるその如く、作家としてまた悠久感を味ふべき幾多の佳作を有するや否や。

- | | | | | |
|----------------|---|---|----------------|---|
| 春風や湯女のさゝ腹分て寝む | 許 | 六 | 高砂に又ひくさごや謡ぞめ | 同 |
| 西風に東近江の柳かな | 同 | | 出代や靜が宿へむさし坊 | 同 |
| 舌打もアゝ春なれや露の臺 | 同 | | 春過て夏來にけらし白牡丹 | 同 |
| 白川を夜舟や京のほとゝぎす | 同 | | 早乙女のさみだれ髪や田うゑ笠 | 同 |
| うどん屋は人にくはれて暑かな | 同 | | 七月や地獄の釜も秋の風 | 同 |
| わたり鳥わたるや池の水かゞみ | 同 | | 獅子舞は口からきくや時鳥 | 同 |
- 中には斯うして謎語的饜語的な駄作があり、第一句の如きは讀むに堪へざる卑猥なものであるが、其の貽した作句數からいへば支考に倍して、悠久性の存する佳作も十數に止まらない。即ち、
- | | | | | |
|----------------|---|---|----------------|---|
| かげろふの中や手毬の土ほこり | 許 | 六 | 鞍つぼにすわりごころや更衣 | 同 |
| 道ばたに繭ほす薫のあつさかな | 同 | | あやめふく女房の家に宿からむ | 同 |

くるゝほど芭蕉にひゞく虫の聲	同	裸身に麻の匂ひやすまひ取	同
懺法のあはれ過ぎたる日の永き	同	うづみ火や夜ふけて門を叩く音	同
大髭に剃刀の飛ぶ寒さかな	同	惣門を鎖のさゝれてきぬたかな	同
これ等に見ても、彼の創作力は確かに支考に優る事幾段である。そして之れに次ぐものに至つては、			
餅つきて鯛待つ門の柳かな	許	清水の上から出たり春の月	同
田うゑ女の寝たらぬ空や時鳥	同	かげろふや破風の瓦の加意寶珠	同
いかい手につかみあげたる雛哉	同	出代や馬の粥かふ御乳の人	同
鎗持は立はだかりて花見かな	同	名月や赤穂の汐汲みいとまなみ	同
送り火の麻木ふみ折る踊かな	同	時雨來る空や女中の多賀參り	同
唐人のうしろむきたる柳かな	同	粕潰の瓜に酔たるあつさかな	同
苗代の水に散り浮くさくらかな	同	春雨やはなれぐの金屏風	同
角罌に腹つき出して袷かな	同	青麥にしばらく曇る淡路かな	同
行年や多賀造營の訴訟人	同	霧雨や尾髪もふらす駒の旅	同
すゝ掃や密柑の皮のやり處	同	明がたや城をとりまく鴨の聲	同
のし餅の上にいさ寝て年とらむ	同	涼風や青田のうへの雲のかけ	同

はつ雪や今朝下られし山法師 同 西東六條どの、牡丹かな 同

など相當價値を有するものが尠くない。其の特色は人事的叙事的表現に存して、此の點は其角に雁行するものともいほう。けれども殊更さうした點に新らし味を求めやうとして、卑俗に墮したるものも、屈指に違まないほど濫作を思はしめる。彼が自ら僭して芭蕉第二世を以て任せるが如きは、噴飯すべき夢人の囁語である。さはれ作家としての彼が、甚だしく其の所論を裏切つてゐないのは、彼の性格が比較的率直にして、子供らしき稚氣の存するに由來するものといふべき乎。唯だ夫れ彼の句は尙ほ犇と迫る眞實に乏しい。眞實から味はるゝ靈性の深みが無い。恩師芭蕉の超絶境に達すべく、其の距離の餘りに遠いことを思はしめる。

顧みて現俳壇に於ける支考たり許六たる者は果して誰々ぞ。我等は言論に據りて主張の擴充に努むる一方、其の創作力を養ふべく努めて尙ほ努めねばならない。 — 大正八、六 —

このころ

— 高野山奥の院にて —

おお。なんとといふ大きな杉だ、なんとといふけだかい杉だ。

大空を支へてゐる、大空を塞いでゐる。大空を鎮めてゐる。どの杉も、どの杉も。幾百千年の過去より現在に、現在よりまた幾百千年の未來に。ゆらぎ交はし、いぶき交はして。おお。なんといふすばらしい墓だ。大小に、方圓に。肩を觸れ合つてゐる、膝を突き合せてゐる、手を握り合つてゐる。

熊谷も敦盛も、團十郎も辰五郎も、信長も光秀も、謙信も信玄も、親鸞も行基も、伊達安藝も大岡越前も、三成も兼續も、淺野内匠も春日局も、秀吉一族も家康一門も、雲上のやんごとなき方々も。心と心とは溶け合つてゐる。魂と魂とはささやき合つてゐる。

杉の木の間、杉の枝葉に蔽はれて。

おお。霧が流れる、杉のなかを。霧が捲きさがる、杉の梢から。霧が湧きあがる、杉の根もとから。ほうほうと墓の一つ一つをかすめてゆく、ゆらゆらと墓の一つ一つに動いてゐる。

おお。芭蕉の句碑が。

父母のしきりにこひしといふ芭蕉の句碑が寒むさうに。霧雫が面となく肩とたくぼたりぼたりと滴れてゐる。

杉の落葉も、笹の枯葉も、霧雨にちかちかと光つてゐる。

鴉が啼いた。あゝ、鳴いて、霧のなかへ消えていった。

頭がうつろになつた、胸がいつばひになつた。

杉も、墓も、霧も、芭蕉の句碑も、ありとあらゆるものが、一つになつてゆらいでゐる。

おお。芭蕉だ、芭蕉だ。

芭蕉がしよぼしよぼと歩いてゐる。霧雨に濡れそぼつた袖を合せて、杉間の墓かけをしよぼしよぼと歩いてゐる。

君もない、父もない、母もない、子もない芭蕉がひとりでしよぼしよぼと歩いてゐる。

もう、慾といふ慾はない芭蕉。

それで、いろいろな慾のある芭蕉。

……父が戀しくなつた、母が戀しくなつた。……

芭蕉の頬には涙が流れた。

芭蕉も人間だ。

俺も人間だ。

俺の眼からも涙が溢れる。

まことだ、まことだ。
まことを求めよう、まことを念じよう。」

— 二二二 —

原稿の都合で、豫定の刊行月次は素より、各輯の題名や内容にも相違を來たすことが有り勝ちであらうと思ひます。豫め御合みを希つて置きます。校正の筆を擱くにあたり、高野山にての記念の一句を左に記さう。
霧よ包め包めひとり淋しきぞ 亞浪

大正十二年四月八日印
大正十二年四月十日發
大正十二年五月廿日再
大正十三年三月十日三

版 權 所 有

刷 行 版

兼 著 者
發 行 者
印 刷 者
印 刷 所
發 行 所

改正定價五十錢
【定價金參拾五錢】

東京市外代々木山谷一七五番地
白 田 卯 一 郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
石 村 勲
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株 式 會 社 秀 英 合 工 場
東京市外代々木山谷一七五番地
石 楠 社
振替口座東京四七七七七番
越山堂藏版

三冊 壹特 五三 錢拾冊 石楠ハフツレト

第一輯	俳句を求むる心	既刊
第二輯	芭蕉を中心として	既刊
第三輯	内容としての自然感	六月刊行
第四輯	我が一茶の面影	八月刊行
第五輯	形式としての一句一章	十月刊行
第六輯	蕪村の言葉を味ひつゝ	三月刊行
第七輯	俳句の靈覺的表現	二月刊行
第八輯	石楠十二年句鈔	四月刊行

石楠 純正俳句雜誌 發行日 一月